

## 「チーム論述書」様式

チーム番号 ( 2 )

研究テーマ名 「関係人口」として持続的に高知に関わる仕組みづくり

# 「気づいたら当事者になっていた」をつくる

## — 高知に関わり続ける仕組み —

### 【序論】

#### 1. 私たちの問いと背景

##### 1.1 問いの出発点

高知県の各地を歩くと、「一步を踏み出したいがきっかけがない」と思う県外者と、「人手が足りない、誰かに関わってほしい」と感じる県内者が確かに存在したが、残念ながら両者は自然にはつながらない。しかし現場を見ると、うまく回る地域には必ず「間の人」がいた。その人がいなくなると関係が途絶える。私たちの問いはここから生まれた。

**「次の一步が踏み出せない人が、誰でも気軽に関係人口になれる仕組みをつくる。」**

この問いを高知県での6地域フィールドワークを通じて検証し、関係人口として持続的に高知に関わる仕組みの提案を本研究の目的とした。

### 【本論】

#### 2. 現場で見えたこと

##### 2.1 フィールドワークから浮かんだ3つのパターン

高知市・日高村・須崎・四万十・大豊・香美の6地域で、移住者、地域おこしの担い手、農家、商店主、NPO運営者、空き家活用の仕掛け人、行政関係者など多様な人々に直接話を聞いた。そこから見えたのは3つの構造的パターンだ。

第一は「つながりのすれ違い」である。県外者は「関わりたいが入口がない」と感じ、県内者は「手が足りないが接点がない」と感じている。同じ地域にいても両者はマッチングされない。

第二は「間の人への依存」である。うまく回る現場には必ず“つなぐ人”がいたが、その人の善意に依存するため持続しない。

第三は「リピートを生む動機の高多様性」である。高知に繰り返し関わる人の動機を分類すると、「育てる（畑・果樹）」「守る（里山・林業）」「つくる（集中制作・学び直し）」「整える（空き家DIY）」「関わる（地域行事）」の5つに整理できた。一部の活動では交通費・宿泊費相当の報酬が発生しうることも確認され、「手弁当のボランティア」ではなく経済的にもペイする関わり方が持続性を高めることがわかった。

##### 2.2 仮説がフィールドワークで変わった過程

フィールドワークを経て三つの重要な気づきが得られた。①北極星（目標）があるから動ける、②人に会いたいからリピートする、③間の人がいれば関係は動く、の3つであり、実際の現場はこれらを精緻化させた。

①について、実践者も最初から北極星を持っていたわけではなく、小さく動いた結果として見えてきたものだとわかった。つまり北極星は前提ではなく結果であり、必要なのは「見つける支援」より「小さく動けるきっかけと場」である。

②について、CLS高知などの事例で「人」が最強の入口になることは確認できたが、特定の人への依存が生じると関係が途切れやすい。動機を「人」だけでなく「役割・居場所」も合わせた形へと移行させる設計が不可欠だ。

③については、“つなぐ機能”そのものを型にして人が変わっても回る仕組みにすることが本質的な課題だと再認識した。

### 3. コトハジメ高知——つなぐ仕組みの設計図

#### 3.1 ジャーニーの設計思想

これらの学びを踏まえて提案するのが、関係人口コーディネート事業「コトハジメ高知」である。設計のコンセプトは「気づいたら高知の関係人口になっていた」という体験をつくることだ。最初から「関わる」を目指さず、気づいたら「関わっていた」という自然な流れを創出する。

具体的には Step1「出会う（SNS・口コミで高知の人や活動を知る）」→Step2「やってみる（収穫体験・ヨガ・制作ワークショップ）」→Step3「通う（空き家DIY・里山整備・地域行事の手伝い）」→Step4「当事者になる（地域行事の運営側・コミュニティの一員）」という4段階のジャーニーを設計している。各ステップでコトハジメ高知がコーディネート機能を担うことで、特定の個人に頼らない「型」として機能させる。

Step1では入り口のハードルを低くし、実践して楽しむ体験をする。Step2ではやりたいことに挑戦することを通して、訪れる動機を人から役割・場所にする。Step3では自分が入り口を提供する側になり、持続的に人をつないでいく。

#### 3.2 持続を支える仕組み

ビジネスモデルとしては、県外者からの参加費・拠点利用料、県内事業者からのコーディネート料・紹介料を主な収益源とする。お金が関係者間を循環することで持続可能性を担保する。空き家を拠点として活用することで低コストな活動場所を確保できる点も一案だ。なお、ファーストピン（最初の受入先）の獲得方法や受入側の負担コントロールという課題はまだ解決されておらず、今後の検証課題として残っている。

### 【結論】

#### 4. 問いへの答えと今後の展望

私たちの問いは「次の一步が踏み出せない人が、関係人口になれる仕組みは作れるか」だった。フィールドワークを通じた答えは「できる。ただし、つなぐ機能を役割分解し、動機の段階移行を設計すること」が前提となる。コトハジメ高知はその具体的な設計図として提案できる水準に達したと考えている。

しかし依然として課題は残っており、収益モデルの実現性検証、ファーストピンとなる地域の開拓、受入側の負担コントロールは次のステップだ。また私たち自身がこの研究を通じて「関係人口から当事者」になりつつある。動けば人に出会い、出会えば何かが始まる——この循環を自分たちでも回し続けることが、最大の実証になると信じている。

### 【引用文献等】

特に無し

以 上